



## 二十周年を迎えて

施設長　岡山　久代

ともなく仕事を探してきていた。

納期の迫る仕事は職員の人数割りで家に持ち帰り内職をしたこと多々あった。そんな仕事の楽しい思い出の中に備長炭の四つの選択を必要とする仕事をもらった事がある。

炭を吸い込むと身体に悪いと思いつくを着用した。休憩時間マスクをはずすと鼻の下が真っ黒で丁度鼻ひげを生やしたようだとお互いの顔を見合せながら大笑いをしたものだ。この仕事は利用者に○×△の選別は出来ても、もう一つ加わると難しいという事を教えてくれた仕事でもあった。

我が家子が障害児と分かつたとき、長い間泣きてくれる毎日であった。可愛かった幼児時代、小学校と通いながらも心の中はどんよりとした曇り空の様に晴れる事はなかつた。

このホームで暮らす一人ひとりが地域の中で安心して生き甲斐のある幸せな生活を送つてほしい。そして、この世に生まれてきつて良かったと思つてくれる人生を歩んでほしいと心から願つてゐる。

また一方で障害の子をかつたと思える人生を送れる事に感謝したい。

まれてきてよかつた」と言つてくれる人生を歩ませたい。自分も「この子を生んで良かった」という人生を送りたいと…。

グループホームが制度化され、やつと動き始めた平成二年、鳴瀧園は通所授産施設として開園した。その当時の利用者の平均年齢は、まだ二十歳にも満たず高校生の面影を残しながら若い職員の後を「先生」「先生」と呼びながらつまつとつていた姿が、とても懐かしく思い出される。

その後、福祉職員を先生と呼ばせない運動が広がり「呼び方を変えて何がどう変わるの」と職員は冷ややかな思いで次の会議の検討課題へと後回しにしていたところ利用者の方は朝礼で少しお話をしただけで、すぐに誰も「先生」と呼ばなくなつた事もあつたと、今こうして記述しながらも笑いが出る。

また授産施設という使命感のもと「利用者に一円でも多くの工賃を渡したい」という理念を掲げ毎日仕事のある環境を整えてきた。景気の低迷で仕事がなくなつた時にはすぐに背広姿の営業マンに職員は早変わり、どこから

ともなく仕事を探してきていた。納期の迫る仕事は職員の人数割りで家に持ち帰り内職をしたこと多々あった。そんな仕事の楽しい思い出の中に備長炭の四つの選択を必要とする仕事をもらった事がある。

炭を吸い込むと身体に悪いと思いつくを着用した。休憩時間マスクをはずすと鼻の下が真っ黒で丁度鼻ひげを生やしたようだとお互いの顔を見合せながら大笑いをしたものだ。この仕事は利用者に○×△の選別は出来ても、もう一つ加わると難しいという事を教えてくれた仕事でもあった。

今、国や県において工賃倍増計画のもの、様々な事業の推進が図られ工賃アップが求められているが福祉の世界は長い間「金稼ぐ」という意識は薄く、むしろ不謹慎と取られる傾向にあつた。

しかし、当園は開園当初から利用者の工賃アップの為にがむしゃらに頑張ってきた二十年間であつたと思う。

次に当園の特徴として上げられることは職住分離の考え方のもと、入所施設は建設しないと明言した事だ。その替わりとして平成七年、山口市で初めて知的障害者のグループホームを設置した。

当初周りからの反対は想像以上の中があり、随分と自分を悩ませたものだが、それでも諦めるわけにはいかなかつた。なぜならこの実現の為に立ち上がりたと言つても過言ではないからである。

我が家子が障害児と分かつたとき、長い間泣きてくれる毎日であった。可愛かった幼児時代、小学校と通いながらも心の中はどんよりとした曇り空の様に晴れる事はなかつた。

ただ日々この子のために一日でも長く生きなければという思いだけは強く精神的にも疲れ切つてゐた。

また、その一方で障害の子をかつたと思える人生を送れる事に感謝したい。